

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'85 春

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内 〒151

振替 東京九一 一九一八九一

発行 一九八五年三月一六日

「女子のみ必修」が終るといふことだけが決った今、運動はひとつの大きな山を越えたと言えます。そしてこれからのいよいよ運動の本番ノ でも、ゆくては深い霧の海——霧の中には変なお化けがひそんでいそうな気がします。運動を確実なものとするために、連帯の輪を拡げ、つなげて行きましょうノ

四月六日の集会、総会にぜひご出席ください。

つなげよう、共修の輪！ 四・六集会

とき 四月六日(出) 一時半～四時

ところ 婦選会館(電話三・三七〇・〇二三八)

報告者 全国高等学校PTA連合会会長

小島幸生さん(予定)

日本家政学会理事 大森和子さん

一九八〇年代研究会委員

暁峻淑子さん

一九八五年度 総会

●とき・ところ

四月六日(出) 四・六集会に引き続き婦選

会館で

共修をめぐって各団体、各地域でいろいろな動きがあります。共修についてさまざまな

人が学校現場で、研究者として、また、運動

をすすめる立場で考え続けています。特に今、

あちこちで教育についての議論が高まっています。それらの力を大きく集めて行くために

情報を交換し合い、話し合ひましょう。

●議事 ★84年度総括 ★85年度運動方針

★84年度決算

★85年度予算

★85年度世

話人 ★その他

もくじ

四・六集会、総会のお知らせ (1)

二・二集会報告 (2)

世話人会報告 (7)

外務省訪問記 (8)

国会議員訪問記 (8)

久保田真苗さん、森山真弓さん、

江田五月さん、中山千夏さん、

中西珠子さん (9)

文教委員へ手紙 (9)

全国教研から (10)

家庭科分科会、女子教育分科会

連絡会報告 (10)

二つの機関誌から (12)

事務局員が変りました (12)

会費をどうぞ

一九八五年度の会費として三五〇〇円(一年分)を同封の振替用紙で納入してください。(一九八五年度の予算は四月六日の総会で決定しますが、世話人会では会費改定の提案はいたしません)。

なお、カンパはいつでも、いくらでも大歓迎ですが、できるだけ郵便振替でお願いします。

本番!! 家庭科男女共修ノ 二・二集会報告

新しい段階を迎えて、共修運動をどのように展開して行こうかと集まった人びと——報告には熱がこもり、会場からも活発な発言がありました。

I 経過報告(要旨)

和田 典子

文部省の検討会議報告が発表される前後の動きを追って(他団体もふくめて)

11・14 署名五五〇〇名分をもって、世話人五名が文部大臣秘書に面会して提出する。

12・13 四八婦人団体を代表して、七団体が文部省を訪れ、職業教育課長と面会、文相、初中局長、検討会議々長宛共修を要請し、文書を手わたす。

12・18 「報告」案を検討し、世話人会としての「見解」文をつくる。

12・19 世話人8名、文部省記者クラブへ「報告」に対する「見解」文書を持参し、記者会見を求めたがかなえられず、引返して職

業教育課を訪う。「報告」についての検討会議が終るのをまって、課長補佐より「報告」の決定版(原案のまま)を受け取る。内容について約三〇分質疑応答。そこで判ったこと

① 本日をもって「家庭科教育に関する検討会議」は解散した。② 文部省は「報告」の趣旨が尊重されるよう次の教課審に申し送る。

③ 文面を解釈する権限は文部省にはない。

④ 教課審の設置は、臨教審の答申ともかわるので、時期はまだわからない。ということなどで、内容についての疑問は何ひとつあきらかにされなかった。

12・20 日刊紙(朝日、毎日、読売、日経、サンケイ、東京、東京タイムズ、赤旗など)のほか、時事通信、共同通信が記事を書ける。

12・23 世話人会をひらき「報告」をふまえて、今後のとりくみをどうするか協議し、文相宛要請文書を作り発送する。

12・26 朝日新聞が社説で早期実現を主張。

1・8 朝日、論壇で半田世話人論稿掲載。

1・11、14 札幌で開かれた日教組教研の家庭科分科会では、家庭科の男女共学をテ

マに、教育内容、教材、方法などを協議した。以上のほか、年末から一月にかけて
。世話人が国会議員と面会して、各委員会で取り上げてもらうよう要請した。外務省の「差別撤廃条約」担当官とも面会した。(8・9ページ参照)

II 「検討会議報告」批判(要旨)

半田たつ子

「家庭科教育に関する検討会議」はこの報告の趣旨に従って、今後教育課程の基準の改正の際に、適切な改善のための措置をとるよう「要請しています。ところが極めてあいまいな文章ですから、「趣旨」を恣意的に解釈されると大変なことになります。私は、それを意図していると疑っているのですが……。ここでは二点を挙げます。

①「基本的な考え方」の1に「家庭科教育がこれまで果たしてきた重要な役割にかんがみ」て検討をすすめたとあります。これは5の「『家庭一般』が、我が国の歴史と伝統の上に立ち、多くの国民の同意を得て、女子教育や母性教育のうえで大きな役割を果たしてきた」と女子必修論者の意見を紹介する箇所

たちとしては「家庭科の履修の取扱い等」の1「男女とも『家庭一般』を含めた特定の科目の中から、いずれかの科目を履修させること」の「男女とも」の一語を武器に、最大限有効に生かすことだと思います。

III マスコミについての報告

(要旨)

中嶋 里美

一九八四年十二月十九日に「家庭科教育に関する検討会議」の報告が出され、各紙が報じたことは前号にすでに書いたが、それから数日後多くの新聞が社説で家庭科共修を取上げた。朝日は十二月二十六日付で「男女平等へ着実な流れを」の中で「必要以上に『男子は』とか『女の子なのだから』といった言葉を含め、性差を強調しすぎることはないか」と述べ、日経は同じく十二月二十六日付で

している。北海道新聞は「なお高めたい家庭科教育論議」の中で報告内容は「家庭科の将来に照準をあてた視点」が欠けていると指摘し、新潟日報は「高校家庭科見直しは十分か」で「やがて古い世代は消える。その間にも共働き、単身赴任、離婚、父子家庭の増加と日本の家庭は変容する。これらの事象は、いやおうなしに家庭科教育に新しい意義づけを迫るだろう」と述べ、京都新聞は、府立高が来る春から、従来の共修を「女子のみ必修」にすることに対し、「教育をあずかるものには、時代の大きな流れを冷静に見きわめる目を求めたい」と結んでいる。信濃毎日には十二月二十四日教育欄で、共修先進地としてはこの報告に強い不満があることを述べている。

また十二月二十六日の新潟日報では「火がついた『家庭科男女共学』」という見出しで新発田商業が来春共修を決定し、教科書を注文する間際に、県教委から「共学は好ましくなくない」という「指導」があり、共学が見送りになっていた経過が述べられている。

朝日新聞一月八日の「論壇」では半田たつ子さんが「欠けた家庭科の位置づけ」として報告が女子必修に終止符を打ったことは評価出来るが、家庭科が一体どんな教科であるのかを明確にしてないことを批判し「学校教育

に結びます。さらに「家庭科の履修の取扱い等」で二つの方法を挙げた後すぐ続けて「いずれの場合も、我が国の歴史や伝統を踏まえ、家庭科教育の重要性にかんがみ、今後とも家庭科教育が十分行われるような配慮が必要」に続くのです。女子教育としての家庭科の重要性をバッチリ記し、今後にも生かそうとしていると読みとれます。

②時代の進展に伴う家庭や社会の変化に対応して家庭科の内容を見直せというのですが、これは「家庭生活に必要な新しい知識や技術などを取り入れ」となり、(1)案の「家庭一般」のほかに「家庭生活に必要な知識・技術に重点を置いたりした新しいタイプの家庭に関する科目」に生きます。「家庭一般」を基礎科目とし、これを履修せずに食物・保育などの選択科目を学ばせることを頑固に許さなかった文部省を思うと、理解できない変節です。これはコンピュータを家庭科に導入する、あるいは男子向き家庭科目として、中学の技術・家庭を延長させる方向を考えているものと思います。さらに(1)案で、当分の間、他教科の科目での代替履修を認めています。ここを生かすなら(2)案と変わらないわけで、条約どこ吹く風です。

読めば読むほどいい加減な報告ですが、私

てもよい。

IV 各地からの報告

まとめ・梶谷 典子

★長崎県から

湯沢 静江

◆長野県の指導主事の西山さんが「家庭科教育に関する検討会議」の委員に決ったということを知った時、高教組の中の研究団体「教育文化会議」の活動として西山さんと呼んで話を聞いたが、「私達の立場に立って発言してくれるのか」と聞いても、もともと女子必修論者の西山さんはのりくくり、「家庭科がなくなるようなことは絶対しません」というだけだった。

◆八月には八千人分の署名を文部省に届けた。検討会議の委員に手紙も出した。

◆十二月二十七日、また西山さんと呼んで報告について聞いたところ、「自分としては報告の1案でなければ困る」ということだった。◆長野県では県立高校の四分の一で必修を実施、選択を入れると男女いっしょに家庭科をやっているところが三分の一。それを当分現

状のままにすることを県教委の係長に確認させた。

◆一月十九日には教文会議の家庭科教育研究会の見解を発表した。

◆組合の組織率が高いという利点があるので、アイマイモコとした検討会議の報告を逆手にとって運動を強くすすめたい。

★東京都から

芦谷 薫

◆報告が出てから、女子必修論だった人たちの間にも「時代は変わって行くのだ」という認識は出て来たようだが、「五教科中心の現状では家庭科を選択してもらえないのではないか」「これから果して家庭科が教えられるのだろうか」という不安もひろがっている。

◆検討会議委員の古松さんが会長をしている「東京都家庭科教育研究会」という団体主催の「教育課程研究会」が一月に開かれ、例年の十倍位の参加者があったが、報告についての説明はなく、今の指導要領の説明ばかりだった。

◆都の組合の婦人部長は家庭科の先生なのでかなりがんばってくれている。指導主事や文部省に実践の記録を含む小冊子を持って行ったりしている。

が起っている。

★鳥取県から

本橋 靖子

◆鳥取では、高等学校の家庭科部会で「女子必修」を決議している。

◆十一月の末に「家庭科教育の課題」というシンポジウムが行われた。意外にも、会場から校長先生の一人が「世の中は必修の方向ではないか」と発言。会が終わったあと「共学をすすめよう」と肩を叩きあった人たちもあった。指導主事はどっちつかずの発言ばかり。

◆署名運動をすすめるなかで「遅れている県だ」ということを痛感した。

◆申し入れがあったので県教組の委員長や教文の人と話し合ったが、他教科の先生との協力の必要を痛切に感じた。

◆十二月二日、鳥取民教連の研究会でも家庭科の報告をしたが、「今までは関心が薄かった」という声があった。

◆指導主事に共学実践の記録など、資料を届けている。

◆地域向けの新しい雑誌「拓く」に「なぜ鳥取では女子必修なのか」ということを書いた。◆日教組婦人部長からの呼びかけもあり、鳥取での取り組みを考えている。

が入試のための「傾向と対策」に終始し、生活から遊離した授業で「落ちこぼれ」を生んでいる中で、男女のかかわりを、生活そのものを学ばせたい」と主張している。この主張に対し、一月十九日付の朝日新聞の「声」欄に三つの家庭科に関する意見が寄せられた。

一つは溝上泰子さんと奈良女高師時代木下竹次氏に出会い彼が「家庭の改造は人類の基礎である。家庭科は人生科である」と述べたことに強い感動を受け、家庭科を人生科にすることを主張している。また原正敏さんが家庭科だけで性別役割分業が変わるのではなく技術教育も共に必要と述べ、主婦の野田礼子さんは自分が受けた家庭科教育が役立たなかったことを述べている。それに対し一月二十八日の同欄で半田たつ子さんが実際の新しい家庭科の授業をみて考えを改めて欲しいこと、また教師の原田澄子さんが現在家庭そのものが危機にある時、学校で生活の基本的な事を教える必要があると主張している。

一月の中ばからフジテレビで「男の家庭科」が始った。失業中の夫役の田村正和が家事や子供の教育に少しづつ関わりながら、従来の男女の役割を変えていく様を演じている。男たちが少しづつでも生き方を変えていくことが生活とのからみで描かれているのはと

◆話し合いをすすめて一致できるところで力を合わせて行きたいと思う。

★神奈川県から

福島 澄香

◆革新知事のもとでも教育は最も遅れている。◆「かながわ女性プラン」に基づいて「男女平等教育委員会」と「男女共修を推進する委員会」ができている。後者のメンバーは大体教員だが、委員長は県にひとつだけ残っている女子高校の女の校長先生で、「女子校を死守する」という立場の人。共修の研究校を指定したが、行ってみたら男子は選択で、男女別々にやっていた。

男女平等教育委員会の中間報告もあまりよいものではない。委員は生徒の実情を知らないようだ。抗議をしたので、これから家庭科の位置づけなど少しは考えてくれるのではないと思っている。

◆「かながわ女性プラン」を作成した女性がプランの実現をめざすために個人的に集まって「女性会議」をつくっている。その「教育部会」ではいろいろ議論の末、共修をすすめるよう県や文部省に働きかけることになった。◆教育庁が中心になってプロジェクトチームがつくれ、「新しい教育」のプランづくり

★埼玉県から

柴田 栄子

◆四年程前から官製研究会の中で家庭科の内容の検討を提案して来た。年一回の公開授業と研究誌を続けている。今年の研究テーマは男女共修についてだが、今どき「共修に賛成か、反対か、時期尚早か」というアンケートをやっている。

◆組合の教育研究会議でパンフレットをつくらうと話している。

◆理事に立候補するなどして官製研究会を動かそうと思っている。

※ ※ ※

このあと、高月佳子さんから都の官製研究会についての報告がありました。

文部省視学官の高部さんの発言——「家庭科では『生活的自立』をめざす。小・中では『自分の自立』、高校では『家庭経営の能力』」「小学校の『家庭』は男子には要らないのではないかとよく言われる」「世界をみても高校で男女必修というところはない」「男女全く同じ内容というのはむり」「男子にもやれるもの、社会科や保健でできないものを考えなければ」「四単位にしたいので」「二単位でもいい

清水和美さんの感想から

政府、文部省、外務省、その他や、自治体ののりくりにものはものすごく怒っている一人です。

それぞれの地域で少人数でも、地道にできることからという意気が伝わって来ました。報告された方がファイト満々なのを見て、皆で手をつなげば強くなると感じました。

い」などと言わないでほしい。

三田高校長古松さんの発言——「検討会議の報告の実施には十年二十年かかってよい。それまでの移行措置の間は、現行の継続だ」。

V 討論から

まとめ・梶谷 典子

検討会議の報告は現状維持を意図するものではないかという疑問が出されたあと、どうやって共修をすすめたらいかという前向きな発言が続きました。共修が進んでいる長野でも、最初に「女子だけ」はおかしいと言いつ出したのは十五人位だったこと、男子校で努力している例など、運動する人を勇気づける

た。

ラジオ放送に關しての報告がなかったのですが、少し残念に思います。今のラジオは本当に「ヒドイ」放送をしています。つまらぬ民放も時にはお聞きになり、一緒に批判の声をあげていけたらと思っています。

司会……若さのさわやかさがとうとう。

発言もありました。特に男性の家庭科教師をふやすべきだということが話題になり、「女しかなれない」という思いこみをなくし、試験に男子が受かるような配慮をすべきだという意見が出ました。

VI 運動の提案（要旨）

芦谷 薫

昨年暮に女子のみの家庭科終了宣言がなされた。これからは男女共修家庭科の制度化めざして今後の文部省を監視しつづける時になった。

そこで、①差別撤廃条約の精神に基いた実質的な男女共修家庭科の制度化要請、②現行

世話人会報告

△一月十三日▽

一、NHK「おはようジャーナル」で近く共修問題を取上げる。

二、久保田真苗さんに一月十四日面会。

三、新潟日報によると新発田商業で決っていた共修が指導主事、校長の圧力で取消された。

四、長い間事務局を担当して下さった桑原さんが御都合で事務局をやめられます。代りに北郷知子さん（☎三三三・七三二九）にお願いします。

五、引続き国会議員への働きかけを行う。

六、二月二日の集会についての役割分担の決定、及び各地からの報告者の確認。

七、四月総会にむけて、担当者一部決定。

（中嶋 里美）

△二月二日▽ 集会終了後、行いました。

●報告—関係者から次のことが報告された。

(1) 二・二集会について、参加者五〇余名、新しい人の参加が多かった。

(2) 国会議員への働きかけ——久保田・みのわ・森山・中山・江田氏などに面会すること

が出来て、共修の学習内容についての意見や、他の議員に対する働きかけ方のアドバイスを受けたり、こちらからは、文教部会での発言要請などをした（8・9ページ参照）。

(3) 「48団体」の行動について——家庭科教育に關する検討会議報告「今後の家庭科教育の在り方について」文部省側とヒヤリングをする——二月十九日（参議院会館）

(4) 全国教研「家庭科教育分科会」で「共修」と言うべきではない、と強い発言があった。

●協議事項

(1) 総会について

(2) 集まっている署名を何時文部省に持っているか——高石氏に連絡をする——

（持田 ナミ）

△二月九日▽

●4・6集会と総会の打合せ

(1) 総括案・八島提出・検討
(2) 運動方針・芦谷案検討、いつ開かれるかわからない教課審へどう働きかけるのか。条約批准後の取組み。黄パンフの改訂版や三冊目の単行本を出す、など話し合い。

(3) 4・6集会のタイトル決定。

(4) 報告者について検討。

(5) 85年世話人の確認をする。

（石川 由紀）

の中でも出来るところから共修がやりやすいような施策遂行の要請という二本の柱で運動しつづけてよう。

具体的には、文部省に直接要請するとともに、国会議員に継続してこの問題を国会でとりあげてもらい、又文部省にも会報一月号外の「文部大臣への要請書」にあげた具体項目について問いただしてもらおう。その際集会で出された「新しい家庭科の男子を含めた教員養成をすすめること」も加える。

市民として、学校現場にいる者として次のようなことをすすめるよう。(ア)教科内容の研究、実践、交流をさらに深める。(イ)共修が実現できるような項目を学校の教育方針に入れる。

(ウ)校務分掌の中に男女平等教育係をつくる。

(エ)必修クラブやロングホームルームなどできる時間を見のがさず共修をひとコマでも実現し実績をつくらう。(オ)男性教師も大阪西成高のように仮免をとるなど工夫して家庭科のセンセイにならう。(カ)生活私塾や寺子屋づくりなどを通して世論づくりをしよう、などなど。

こと家庭科に關しては、世論変われば文部省変わる、現場変われば文部省かわるだろう。だから、やれることからドンドンやっちゃおう。

司会

大嶋 せい
八島 紀子

外務省訪問記

石川 由紀

一月二十一日、婦人差別撤廃条約批准準備室の高木南海雄室長に半田と石川が面会。条約の呼称を「婦人」から「女子」に変えることになった話から伺ったが、一時間余に渡る会談中、家庭科に関する部分のみ要約して記す。

問 家庭科教育に関する検討会議の報告について外務省ではどのように受けとっているか。
答 一応男女同一課程になったのだから批准には問題はない。委員の半数が女子のみ必修という中、よくまとまったと思う。

問 十条B項は満たしたとして、前文やC項のいわゆる概念の撤廃についてはどうか。
答 家庭科では云えない。今回は高校での家庭科であって、小学校から一貫した教育の中で考える必要もあるし、学校教育でどの程度やるかとか、社会教育との関係もあろう。それは文部省の問題である。

臨教審との絡みで教課審も開かれていない現状で、批准された一年後、外務省はこの件に関してどのような報告書が出せるのだろう。

国会議員訪問記

★久保田真苗さん（一月十四日）

昨年一月国会質問で家庭科問題の口火を切ってくださったり、当会の集会にも出ていただいた久保田議員を議員会館に半田、梶谷、石川の三人で訪ねました。一時間四十分の話の中から、その一部を御報告します。

家庭科教育に関する検討会議の報告はつきりとした形にはなっていないけれど、女子のみ必修から「男女とも」という方向だけは出されたわけで、外務省としては教育分野での男女の機会均等が約束されたことになるから、批准のための障害がなくなったとするだろう。

これからは国民監視下に置かれることになるわけだから、今後文部省がどのように扱っていくかしっかりと見届ける一方、国民側も働きかけをしていかなければならない。私も折にふれ「あれは今どうなっていますか」などと国会で質問はしていく。質問の回数が多くなるように、予算・決算・文教・外務など各委員会の議員や婦人議員連盟など各方面へ働きかけていくのもいいだろう。（石川 由紀）

★森山真弓さん（二月二十九日）

「いらっしやい！」森山さんの快活な声に迎えられた私達（石川・中嶋・芦谷）は、本会議前のお忙しい時ではあったが約十分程の会見をしてみました。

撤廃条約の実質的な批准遂行者である外務政務次官としての森山さんは、家庭科の男女共修問題についてもよく理解されており、この日も午後から栃木県立黒羽高校で男子の家庭一般の授業を見学されるということでした。批准には、女子のみ必修がはずされたことで良しとする外務省見解に対して、私たちは実質的な共学必修の家庭科実現のために、批准後も継続してこの問題を国会でとりあげて欲しい旨を要請しました。

これに対して森山さんからは「私はよく解っている。他の自民党女性議員によく理解してもらえよう働きかけて欲しい」との要望がありました。又高校段階で必修の必要があるのか、社会教育で充分ではないかという論に対する確かな論拠が今は欲しいとの課題も出されました。そのために男子の家庭科を

見学するのだと言っておられました。

（芦谷 薫）

★江田五月さん（二月二十九日）

昨年の国会では実にすばらしい論を展開され、文部省に検討会議を開かせた仕掛け人江田さんに、今後の運動の国会レベルでの方策をお尋ねしました。

文教委員会での議題の決め方は？臨教審への働きかけは？などについて、熱心にアドバイスをくださった。議会内で協力してくれそうな議員の紹介、電話打診などであつという間に一時間が過ぎました。同席していた湯川氏には、ロビー活動のハウ・ツウについて具体的にノウハウを教えていただきました。

文部省へは、共修にむけて今すぐやれる具体項目に早急にとりかかるよう各議員からブッシュしてもらおう、文教委員会に外務省文部省を呼んでヒヤリングを行う等、私達が具体的に何をすればよいかが明らかになって、大変有意義でした。

最後に「何でもやりますよ」という力強いひと声に、石川・中嶋・半田・芦谷は、元氣ゲンキの訪問でした。

（芦谷 薫）

★中山千夏さん（二月二十九日）

いつも気取ったところのない中山議員に迎えられて、中嶋・芦谷・石川の三人はとてもリラックスした気分になった。

国会等で家庭科問題を取り上げて欲しいと云ったところ、自分は法務委員会だから難かしいが、つながらないことはないと思う。考えてみる。それよりも婦人議員懇話会や婦人の十年議員連盟へ働きかけるのいいと思う（名簿をコピーして下さった）。又自分は党に所属していないからメリットもあるが、動きにも限界がある。しかし、私を利用出来ることの一つに議員の質問書がある。これを議員が内閣に提出すると一週間以内に解答がくるといふもので住民運動でも効果を上げたことがある。陳情などの紹介議員でも何でもやるから利用法を考えてみてはどうか。いつでも持ってきてくれれば対処する。

国会の各委員会のしくみや、議員への働きかけの方法、彼女発行で二千部という「地球通信」への投稿のことなど、参考になった。

（石川 由紀）

★中西珠子さん（二月二十九日）

参議院議員会館に芦谷・中嶋・石川の三名

で中西珠子議員を訪ねた時、本会議中だったので秘書の高木和長氏に次のように陳情した。中西議員は労務委員会の所属であるから、日本の婦人の状況と諸外国のそれとがいかに関連しているか、又日本の男性の就労時間の長さ及び家庭責任をほとんど果していない現状などはよくご存じのところである。だから男子にも家庭科を学ばせる必要があることはよくおわかりのことと思う。男女雇用平等法とともに家庭科の男女共修はいわば車の両輪であることを御理解の上、国会では是非取り上げて欲しい。又、他の議員にも積極的に働きかけて欲しい。

（石川 由紀）

文教委員へ手紙

国会の中でも共修問題に一番関係が深いのは文教委員会です。共修実現に向けて協力を求めるため、世話人会では衆・参両院の文教委員全員に対して手紙を出しました。検討会議の報告とリーフ、パンフも同封して、検討をお願いしました。二月四日付。（梶谷 典子）

全国教研から

家庭科教育分科会の報告

持田 ナミ

一月十一日から四日間、札幌で全国教研が開催されました。

家庭科教育分科会には、小学校十一、中学校二十四、高校十一のレポートがあり、延べ五百人近い参加者で発表、討論が行なわれました。「男女共学」に関わることにしほって、感想を交えながら報告したいと思います。

(1) 基調提案の中から「和田助言者から、家庭科をめぐる情勢の中で、男女共学・共修をめぐる情勢の中で、家庭科教育に関する検討会議」の発足と民間団体のさまざまな行動や「報告」内容にもふれて詳細な報告がありました。

(2) 討議の中から「男女共学をめぐる情勢や今後のとりくみについては、共通理解されたように思いましたが、運動の進め方については、きめ細かな論議はできませんでした。

共学の必要性については、性別役割分担意識を克服する面から強調され、子どもの発達つまり人間教育の立場から必要だという主張

が弱かったように思いました。

(3) 男女共学家庭科の教育内容について「日教組から「試案」が出されたので、討議する機会がもたれましたが、資料が当日配布されたこともあって「持ちかえて検討します」という発言や質問にとどまって、深めることができず、今後問題が持ちこされました。

京都や長野をはじめ、教研で積みあげてきた共修の研究成果を土台にして、積みあげて発展させる必要を感じました。

(4) 男女共修の状況「殆んど実現していない県や親もいっしょになって技術科教師に働きかけて実現した例、子どもが荒れて、別学に戻ったところ、荒れる子どもをたてなおすために共修にふみきり全面共学を実現したなどさまざまな報告をききながら、共修を進めるためには、教師のやる気と学習内容、職場の協力が鍵ではないかと思いました。

女子教育分科会の報告

武市 成子

雪の札幌でひらかれた34次教研の女子教育分科会には、エキサイトする場もなく一定の論議がされました。

全国から52本のレポートが出されましたが、

(一)「検討会議」報告のヒアリング

文部省初等中等教育局 山本職業教育課長 補佐より、「今後の家庭科教育の在り方について」の解説を約三〇分間きき、質疑を三〇分おこないました。

解説は「報告」の文面をそのままよみ上げる形でしたが、特記することもありませんでした。後半の質疑のなかであきらかにされたことを発言順に報告しましょう。

Q1 (新日本婦人の会、日本婦人会議他)

「歴史と伝統を尊重して」が何ヶ所もみられるがその意図はなにか、「条約」は「歴史と伝統」の母性教育、女子教育を否定しているのではないのか。

A1 家庭科教育が尊重されてきた歴史をふまえて家庭科が十分行われるようにとの意向。どんな配慮をするかの方策は提言なかった。

Q2 (日本婦人会議)

10条(b)項には答えているが、(c)項について配慮されたのか。

A2 (c)項についても配慮した。「報告」は履修形態についてだけ報告したものである。

Q3 (共修をすすめる会、ほか)

この「報告」の実施を監視する責任機関はどこか、また教課審はいつ設置されるのか。

A3 内容についての責任は文部省がとる。

「条約」「報告」の趣旨、方針は尊重し、次の審議に反映する。時期の見通しは立たない。

Q4 (主婦連合会)

議事録を公開できないか。

A4 それはできない。

Q5 (婦人有権者同盟)

抽象的で解釈が異なる点が問題だ、教課審の人選についての考えが知りたい。

A5 教科にくだしい人、教育課程の全体が見通せる人でなければならぬと考えている。

Q6 (NGO国内委員会)

外国の実情は、男女がともに学んでいるがそれは確認したのか。これで批准できるか。

A6 他国の中等教育では選択が多い。可能。

Q7 (共修をすすめる会)

新しいタイプの科目として何を考えているか、また、なぜ代替履修をみとめたのか。

A7 たとえば消費者教育、コンピュータの導入など男子にもやれ、時代の要請に 대응するようなもの。代替は直ちに条件整備がでない場合も考えて入れた。

以上の解説をうけて、連絡会では対策を考え、臨教審への働きかけを急ぐ予定です。

(二) 国連婦人の十年世界会議をむかえるに際し、婦人問題企画推進本部に対する要望

その中で、母親や卒業生の就労実態調査を行ったり、その調査をもとにした実践がたいへん多くありました。

討議は婦人をめぐる情勢(子どもの実態も含めて)、労働をどう教えるか、家庭問題・家庭科の男女共学、自立した性をめざして、総合的なとりくみで教育改革を、の五本の柱で行なわれました。

三の柱家庭問題・家庭科の男女共学の討議では、家庭の現状が具体的にはほとんど出ず、家庭像がえがけませんでしたが、家庭科の男女共学の実践が多く出されましたが、家庭科が性別役割分担を打破するための単なる手段のようにとらえた発言があったのはたいへん残念に思いました。

国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会報告

和田 典子

二月十九日、参議院議員会館で四八団体の全体会が開かれ、午前中の常任委員会もあわせて、約六時間にわたる話し合いをしました。

1. 日本政府代表団に民間婦人団体から複数の代表を加えること。

2. 日本政府は、ESCAP地域政府間会議で採決した勧告を推進すること。

3. 婦人問題企画推進本部機構の強化をはかること。(法的に位置づけること)

4. 婦人の政策決定参加を促進すること。(審議会等への婦人の参加一〇%を達成する)以上(要旨)の原案を決定しました。また、国連への日本レポートの公開も要請します。

(三) 参議院婦人議員を囲む懇談会

雇用機会均等法案および婦人差別撤廃条約に関する今国会での対応について、約一時間半にわたって、懇談をしました。

参加議員は、全員十九名中九名(森山(自)、糸久・粕谷・久保田(社)、下田・安武・吉川(共)、刈田(公)、抜山(民))でした。はじめに五分づつ発言してもらったあと、意見を交換しました。そのなかで争点になったことを二、三ひろってみますと、

(1) 「均等法案」に対して自は賛成、野党は一致して反対しているが、四党共同提案で審議をつくすべきだとする社と「実」をとる道をさぐっている公・民、五党が協力してたたかうことを強調する共、と態度がくいちが

い、これがネックであることがわかりました。婦人団体からは党派をこえた協力、団結を求める発言が次々出されました。

(2)「条約」批准と、実効ある雇用平等法をかりとることとの関係では、一歩前進として均等法を成立させて批准すべきとする自に對して、「法案」の成立は、条約批准の条件ではない、条約の早期批准と実効ある雇用平等法の成立とを、ともにかりとるために大同団結を訴える共との対立はハッキリわかりました。社は立法措置ぬきで批准は成立しないとの見解で、今後の方針は公・民もふくめて模索中との感じをうけました。条約の理念を実現することを尺度に統一することを急ぎます。

二つの機関誌から

梶谷 典子

検討会議座長の

「母性教育」論批判

— 全国家庭科教育協会

機関誌から —

「家庭科教育に関する検討会議」の座長だ

った共立女子大学教授間宮武さんは、「男女・子育て・家族」と題する文章（「性心理学者からの雑言」という副題がついていて、怒りが察しられます）で、性度も家庭のあり方も多様化している今、家庭科教育の対象も考え直さざるを得ないということを述べ、更に次のように書いています。

「母性教育という名の下に結婚志向と家庭の主婦向きのみを強く期待することは時代錯誤の誇りをまねがれない。家庭科教育が従来にも増して重要であり、かつ真剣に考えなければならぬ事情はこの点にあると考える」そして、母親による母乳哺育の重要性をときながらも、父親の育児参加の必要性を強調しています。

座長がこういう考えなのに、あのような報告が出たとは——。

高P連の決議に対する

署名運動のよびかけ

— PTA研究150号から —

昨年の高P連の「『家庭一般』の現行履修形態は絶対に存続されるべき」という決議に對して怒りをもやしている関千枝子さん（全

国婦人新聞編集長でお嬢さんが高二）は、来

年度の高P連の大会で変な決議が出ないようにと、署名運動の提案をしています。内容はソフトに——昨年の決議文のように考える人もいるが反対する人もいるのだから、相反する意見のあるものを大会決議にしないほしい。昨年の決議文から、少くとも「三〇〇万会員の代表六千名」はけずって「大会有志」とすべきだ——というようにして、会員の一分、三十万の署名をとりたいうので、「一しよにやって下さるドン・キホーテはいませんか」と呼びかけています。

事務局員が変わりました

桑原芳子さんが多忙で続行不可能になったため、北郷知子さんに引き継がれました。

桑原さん、長い間ありがとうございました。新事務局の彼女は国学院大の田中和子ゼミ（女性社会学）出身で23才。専門学校で服飾デザインの勉強中ながら自活している程だから、当然家庭科の男女共修の必要性など先刻理解の人。事務局のある婦人会館と通学先が歩いて数分というのが便利です。若さで行動力でよろしくお願い致します。

（石川 由紀）